

蒲生干潟の植物56

2026年6月25日



図1 定点観測



図2 大きくなってきたハママツナ



図3 ヨシの穂



図4 コウボウシバの穂

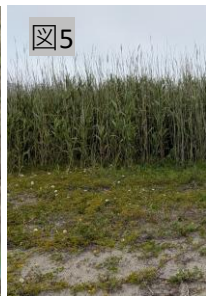


図5,6 エリアHのヨシの際にテリハノイバラ



図6



図7 ハマボウフウとツチバチ



図8 エリアH

調査日 2026年6月25日 (木) 13:00~14:30

エリアBのハママツナは範囲も広がり個体ごとの草体も大きくなっていった (図1, 2)。エリアAのヨシは昨年度の穂で、新たな穂は夏の終わりごろからでき始める (図3)。勢いよく伸びていくヨシの新しい草体 (図5)。ヨシの根元や潟湖周辺の泥地にはアシハラガニなど多くのカニが見られた。図5はエリアHの潟湖付近の様子である。ヨシの育つ範囲がきれいに揃っているのは潟湖からの水分が届く限界のラインであることが分かる。ヨシの手前にはテリハノイバラ (図6) が広がっていた。これまでも日和山付近や防潮堤付近では見られていたが、潟湖より東側の砂丘地帯では確認されていなかった。エリアHは昨年度までは定期的な調査をしていなかった範囲のためいつから育ち始めたかは分からないが、被覆範囲がまだ狭いことからおそらくこの1, 2年のことではないかと考えられる。震災前はハマナスとともに繁茂していた (2015, 松本) とあるが、震災以降の本調査では確認されていない。今後の広がりを期待したい。図7はハマボウフウの花に集まるオオモンツチバチである。オスメスともに蜜を吸いに花を訪れるため、多くの植物にとっての重要な花粉媒介者である。図8は高く伸びるメマツヨイグサと這うように広がるコマツヨイグサである。海浜性の植物が育つ隙間はほとんどないエリアである。(伊藤勝彦)